

報告

司会

まもなく再開させていただきます。お席にお戻りくださいますようお願いいたします。

それでは、昨日のパネルディスカッションの報告に移らせていただきます。

本サミットでは、昨日、「【歴史から学ぶ】近世から近代における世界文化遺産の観光史」をテーマとしたパネルディスカッション1と、「【現在（いま）を知る】歴史・文化遺産都市を支える『まちづくり』」をテーマとしたパネルディスカッション2を実施いたしました。

各パネルディスカッションのモデレーター・パネリストから、パネルディスカッションで出た意見についてご報告をいただきます。

はじめに、パネルディスカッション1「【歴史から学ぶ】近世から近代における世界文化遺産の観光史」のパネリストを務めていただきました、京都橋大学非常勤講師 森下恵介様からご報告をいただきます。

森下様お願いいたします。

パネルディスカッション

京都橋大学 非常勤講師 森下 恵介



みなさんおはようございます。今、ご紹介に預かりました森下です。

昨日、パネルディスカッションとして「近世から近代における世界文化遺産の観光史」ということで、その内容についてご報告させていただきます。

まずテーマ1ということで、近世から近代における各世界文化遺産の文化財や観光の状況についてということで、斑鳩町の平田政彦さんの司会進行で、奈良の方を私が、京都を京都市の堀大輔さん、日光を北山建穂さん、百舌鳥・古市古墳群について堺市の白神典之さん、5メンバーでご討議させていただきました。

まず、近世から近代における各世界遺産の文化財や観光の状況についてなんですが、奈良からご報告させていただきます。

奈良観光というのは、基本的には奈良が都でなくなったとき、平安京、京都へ都が移ってから平安貴族のふるさととして名所が成立してくる。歌に詠まれてる名所ですね、『百人一首』で詠まれるような、例えば、この近くでしたら竜田川であるとか、あるいは奈良でも「あをによし奈良の都」であるとか、それが名所としてなるんですけども、本格的に名所といいますか、奈良観光、今で言います観光に近いものが始まるのは、何といひましても江戸時代の大仏の再興ですね。元禄5年の大仏開眼、あるいは宝永6年の大仏殿の落慶を契機として、そのときに奈良になんかは、1日に5万人の人が押し寄せたというんですよね。それによりまして旅籠屋であるとか宿泊施設であるとかも整備されて、案内書、ガイドブック的な案内書なんかも刊行されていくようになります。

法隆寺におきましても、この元禄年間に大修理が行われます。恐らく法隆寺におきましては、この元禄の大修理というものがなかったら、もしなかったら、この世界最古の木造建造物である法隆寺は現存しないのではないか、しなかったんではないかと言われるぐらいでして、非常に重要なことです。奈良におきましても、世界遺産、東大寺の大仏殿、あれがない状態を想像しようにもできないんですけども、そういう状態やったわけですね。

奈良ではそのほかに、それを契機に、猿沢池から始まる1日の名所巡りコースなんていうのも確立しますし、それから京都から奈良の地理的な関係でいいますと、京都から約十里、40キロメートルあるんですね。大阪からは奈良へは八里八町、生駒山の暗峠を越えまして、直行で奈良へ向かいまして八里八町。いずれにしましても当時の人は約1日十里歩くわけですから、奈良へ参りますと宿泊せざるを得ないわけですね。で宿泊して、もう一日、観光して帰るといのが成立するわけですね。

この辺が近代になりまして、鉄道的发展で奈良へは日帰り、現在でしたら大阪へ30分、京都へも30分ちょっと、40分ぐらいかかりますけども、40分で行けるわけですから、日帰りになりまして、どうしてもこの点は、交通が発達すればするほど宿泊が減っていくというようになるわけですね。

近世にはそのほかに、奈良の名所巡りコースのほかに、西ノ京、法隆寺、當麻寺、橘寺、壺阪寺、岡寺な

んかを巡る「大和七在所めぐり」というのも確立しました。このときに奈良から法隆寺へ回る、あるいは法隆寺から當麻寺へ回るという、大和1周の観光コースなんかも江戸時代には出来あがってます。

それから、江戸時代には奈良奉行、奈良のまちは天領でして、幕府領ですから奉行所がありまして、その奉行所、奈良奉行の仕事の一つに、奈良の社寺の宝物を巡検するというのがあるんですね。大和の社寺を回って宝物を見て回るという仕事なんですね。確認する。これは一つの江戸時代の文化財保存のあり方なんですね。奉行が着任ごとに奈良県内を回って、大和の、当時は奈良県じゃないですけども、大和の国を回って宝物を巡検する。だから、見るべき宝物は決まっています、その宝物を選んでものは幕府、要は江戸幕府が選んでまして、公儀が選んだ宝物を巡検する。これによって近世の文化財の保存というのが成り立っているわけですね。だから、もし破損してたり何か紛失してたりすると、奉行の巡検のときにないわけですから、これはもうえらいことになるわけですね。そういった形が、一つの江戸時代の文化遺産の保存のあり方やったようです。

また、法隆寺の修理、あるいは元禄の修理、奈良の東大寺の再興なんかで忘れてはいけないのは、5代将軍綱吉とその母の桂昌院、あるいは奈良出身の隆光僧正、この3人なんですね。この3人がどうしても明治以降、悪く言われているんですね。

5代将軍綱吉は犬公方で、犬をかわいがったと。隆光僧正の提言で、桂昌院はお金を社寺の復興ばかりに使ったので、江戸幕府は傾いたとか、そういう話になるんですけども、実際問題としては、そういうことはないわけですね。綱吉の「生類憐みの令」にしましても、大事なものは人殺しの時代、要は戦国時代が終わって平和な江戸時代になった。だから、人を殺すのは悪であるということを綱吉はすすめたわけですね。仏教的な考えで、慈悲の考えでお寺の修復なんかもしたわけですけども、奈良にとっては、この3人は「大恩人だ」と言っていていいんだろうと、私は言うて回っておるんですけども。

それから、その奉行の巡検ですけども、幕末に名奉行と言われる川路聖謨（かわじとしあきら）という奉行が奈良奉行に赴任しまして、川路聖謨は奈良の興福寺や東大寺に景観保全として楓や桜を植えたり、あるいは導者案内人と呼ばれた案内人ですね、案内人の質が悪いというので、その改善に取り組んだりしてますけども、川路聖謨の時代になりますと、だいたいの考え方が合理的になってくるんですね。仏像でも彫刻として

川路の日記なんかでは評価しております。

こういうふうな幕末の合理的な考え方が、明治の廃仏毀釈、あるいは神仏分離につながっていくわけですね。だから、仏像は川路の日記なんかによりますと、お寺さんもおられるので怒られますけども、川路の日記では、「彫刻的に優れたのは目も見張るばかりの仏像」と書いてますけども、あとは「銭にもならん仏ばかりなり」とか書かれてるお寺もあります。こういう考え方が明治には廃仏毀釈、「つまらん仏ばかりやから壊してもかまわん」とかいうようにもなりますし、あるいはその優れた技術、彫刻技術というのは近代的な文化財の保全にもつながっていくわけですね。例えば、明治17年あたりでしたら、フェノロサとか岡倉天心とかの仏像調査が有名ですけども、法隆寺の救世観音もそのときに開帳されたといいますが、その頃から、仏像は信仰の対象というよりも仏像彫刻になっていくんですね。仏像彫刻になっていきまして、奈良公園でも廃仏毀釈で壊された興福寺を奈良公園にしようというのが、市民の中から出てきます。こういうふうな奈良公園と、あるいは仏像彫刻としての評価、これは東大寺の回廊で奈良博覧会というのを開きまして、正倉院、今、正倉院展をやっていますけども、正倉院の宝物であるとかをそこに陳列するんですね。それで観光に資するようにする、あるいは奈良の産業の発展に、伝統産業の発展に資するようにするべきだというのが、市民の中から出てくるんですね。それが、やがて明治29年の奈良帝国博物館、今の奈良国立博物館ですけども、その誘致につながっていきます。だから、奈良博覧会というのは博物館の開設につながるんですね。博物館では、もう各お寺からのそういう文化財の保存のための寄託とか受けていきますので、仏像が仏像彫刻になっていくわけです。

こういうふうな、観光価値も歴史的価値、美術的価値になりまして、霊験譚が飾られていた名所旧跡は、歴史的な文化財遺産の見学へと変化していくわけですね。

そのために、明治30年ぐらいになりますと、修学旅行というのが始まります。修学旅行、奈良・京都が対象になっているのは、日本の天皇制が一番盛んな時代、これも奈良・平安時代なんですね。その盛んなようすを全国の子どもたちに見せて、日本人、日本の国民だということを自覚させるわけですね。それまで薩摩の人間だ、やれ長州の人間だという、地域ごとのお国意識しかなかったのを、全て日本国民であって、古代にはこれだけ栄えた日本国なんだということを見せるがために、修学旅行というのが始まっていきます。

修学旅行がさらにその後、大正、昭和に入っていきますと、古代を検証する。平安時代は軟弱である。平安時代の『百人一首』や『源氏物語』は恋愛物ばかりで軟弱だと。それより質実剛健な強い日本国になるためには、古代『万葉集』や『古事記』、『日本書紀』の世界を検証していくわけですね。奈良県もそれに乗りまして、今まで公園課であるとか観光課でやっていた行政が、聖地顕揚課というようなものになりまして、今まで、そうですね、飛鳥文化というのはこの法隆寺、斑鳩が飛鳥文化を知るための場所だったんですけども、それが昭和に入りますと、明日香、明日香村が大化の改新の舞台であるということで、神武天皇の畝傍を聖地顕揚すると同時に、明日香を大化の改新の舞台として、石舞台古墳の発掘であるとかいうのがすすめられて、「明日香が飛鳥文化」というふうなものになっていくわけですね。そういうふうな、「天平礼賛」とか「天平造形」、「古代変調」の風潮が聖地大和というものにつながっていったということは、これは無視ができないことなんだろうと思います。

奈良ばかりしゃべってて申し訳ないので、ほかの話では、京都なんかでは同じようにやはり17世紀から京都ブランドというのが成立します。後半には観光案内書も刊行されまして、京都の観光地の社寺でも、江戸時代には拝観料の徴収なんていうことを行うようになってます。それから、洛陽33所とか六地藏巡りなんていう、そういう巡礼コンテンツなんかも成立していくようです。近代の嵐山、東山などの風致維持は明治に継承されまして、明治28年、平安遷都1100年の博覧会開催など観光施策の発展・継承が行われていきます。

日光の場合は、日光観光が本格的に花開くのは明治以降だといいます。多くの外国人の来訪や観光ルートが確立していくと。

百舌鳥・古市古墳群、これは古墳の話になるんですけども、百舌鳥・古市の大規模巨大古墳につきましては、近世の地誌や名所図絵にも紹介されてるんですけども、近代にやはり天皇陵に受容されたことによって、人々の関心がより高まっていったと。鉄道の整備なんかによったり、あるいは奈良のそういう聖地顕揚と、これは対になるんですけども、皇陵参拝団なんかも組織されまして、天皇陵に陵印ですね、はんこを備えるようになりまして、これは今でもあるんですけども、要は33所の朱印集めと同じでして、天皇陵巡りしてはんこをもらうというのが行われるようになりまして、天皇陵巡拝なんか盛んになったと言えます。特に、堺には仁徳天皇陵に受容

されてます大山古墳について、仁徳天皇というのは、教科書にも取りあげられる有名人ですので、あるいは古墳も世界最大の古墳ですので、そういうものに関心が集まっていったということです。

それから、テーマ2の各遺産での登録後の状況及び課題についてでございます。

奈良では、1998年の「古都奈良の文化財」の登録の年に、平城宮の朱雀門の復元、2010年に第一次大極殿、お寺では登録前から伽藍復興がすすめられておりました薬師寺で、登録後に講堂2001年、食堂2017年と、再興事業がすすめられております。また、興福寺においても2018年に中金堂が復興されておりました、現在でも平城宮跡では大極殿院の南門であるとか、東西楼の復元がすすめられているところです。

これらの復元、まさに世界遺産登録後、こういう遺跡の整備、あるいは成合建物の復元工事が急速に進んだということは言えるかと思います。いずれの復元も学術的に裏づけのある復元なんですけども、奈良時代の平城京の在り様をどこまで復元するのかというのは、今後のやはり課題になるかというようにも思います。また、どこで止めるのか、今後、議論が必要になってくるかもれません。

また、オーバーツーリズムの問題についても出かけてるようでして、将来にはそういう遺跡の整備とか遺産の保持・維持のための費用を捻出するためには、ベネチアのように観光客を抑えて遺産の保護・整備費用に充てる、例えば、奈良公園への定額の、そんな高いお金じゃないでしょうけども、定額の入域税といいますか入園料でなんでしょけども、そういうふうな徴収についての議論も必要になってくるのかもしれない。

京都はもともと観光地ですので、登録後に直接、大きな変化は見られないということでしたけども、それでもやはり観光客が多いのは、集中するのは、清水寺、金閣寺、二条城だそうございまして、集中の解消についての施策も打っておるといようなことです。

また京都では、特に外国人のマナーがよく話題になっておりますけども、このマナーの悪さは日本人も変わらないということで、食べ歩き等は日本人も変わらないで、特に旅行という特殊な、特別な体験、よく特別体験で入れないところに入れるといようなものが、モラルのハザード、要はモラルの低下にもつながっていった面は否定できないといようなことが指摘されておりました。

だから、そういうふうな非日常が、モラル崩壊を起こ

させている一つの原因にもなるんじゃないかということですね。だから、かなり特別な体験、特殊な体験というのは、行うには注意が必要だろうということです。本質的価値を失う可能性もあるということでしたけども。

それから、日光の場合は、登録後は観光客は増加しておりますけども、やはり大きく問題になるのは、行楽期の自動車の渋滞が大きな問題やそうです。臨時駐車場の開設とか、混雑情報の提供なんかを行っております、外国人の増加につきましては、鉄道と交通機関を利用しているので、あまり影響はないということでした。

百舌鳥・古市につきましては、登録後のコロナ禍で来訪者が減ったということです。それよりも構成資産である古墳の保全であるとか整備が、やはり課題になってくるということですね。

ディスカッションとして、オーバーツーリズムについて集中の解消、混雑予測、情報の提供なんかが必要じゃないかということですね。それから、やはりそういう資産価値への影響が大きい来訪者数について、やはり考えていく必要がある。そうしないと、本質的な価値が失われることもあり得るのではないかということですね。それから、テーマ3の将来への保存と継承につけての希望などでございます。

まず、1つ目としましては、登録資産の追加、世界遺産が登録されてから変化がないようですけど、それを史跡整備の価値の付加とか、より魅力を高めるために、登録というものがその資産のゴールではないと。さらに、付加価値としての数を増やすことを考えてはどうかということです。

何もしないで放ついても文化財というものは残らないわけですね。近世・近代の人々の歩みから見ても、何もしないで1000何年間今に残ってるわけではないんですね。江戸時代からいろんな人、江戸時代あるいはそれ以前からいろんな人が努力をしているから現在まで残ってるわけで、その価値を高めるためのやはり行動というのも必要なんじゃないか。

これは具体的に言いますと、例えば、奈良の文化財でも今現在、飛鳥・藤原を世界遺産にということですから、飛鳥・奈良と、飛鳥・藤原と奈良の文化財というものを、古代国家の形成ということで統合するということも考え方ではできるんじゃないんだろうか。あるいは、奈良の大和古墳群、佐紀古墳群、馬見古墳群というような大型古墳群と、大阪の古市・百舌鳥古墳群を統合してもかまわないんじゃないか。これは、現在でも北海道・東北の縄文遺跡群であるとか、

あるいは日本の近代化遺産というふうな他府県にわたるような世界遺産もあるわけですから、もう少しそういうふうなものも考えて、広く世界遺産の価値を高めていく必要があるのではないだろうかということですね。

それから、京都では「見つける」「知る」「守る」「活かす」をキーワードとしての取組みをしておられまして、特に地域ガイドの活躍が期待されております。

日光では、日光の文化遺産に特徴的な建造物の修復ですね、現場の見学とか祭式などの体験ツアーなんかも図られるべきだというようなご意見がありました。

百舌鳥・古市につきましては、未指定の古墳の追加指定とか、市街地と文化遺産保護の両立、緑ある景観保全ということで、世界遺産の価値を高めることが都市の価値を高めるということになるんじゃないかというご意見がありました。

各遺産の課題はさまざまで、課題の取組みもまたさまざまだと言えらるかと思っておりますけども、いずれの遺産にしましても、長い歴史の中で、先ほども言いましたけども、人々が何もせずに現在に残っているものではないわけですね。先ほど、江戸時代の大仏殿の再興であるとか、あるいは大仏殿の再興のなんかひよっとすると、将来的な評価としては、現在行われている建物の復元が評価されるかどうかというのは、後世に任ざなんあかんわけですけども、そのおかげで現在の世界遺産があると。守るべきとした人々の意思ですね。奈良奉行におきましても、正倉院、今、正倉院展をやっておりますけども、正倉院の宝物、あれが現存するのは、天保に奈良奉行が正倉院を修理したからなんですね。正倉院の雨漏りを修理して、正倉院の文書、紙くず同然になっていた古文書を卷子仕立てに仕立て直したから現存するわけですね。奈良時代の文書が現存するわけです。だから、何もせずに残ったわけじゃなくて、守るべきとした人々の意思によって守られてきたわけですね。法隆寺も同じことですね。現在に伝えられたわけですけども、だから、守っていくためには、無論、そういう修理、修理を行う技術、あるいは修理を行う材料、その確保も要りますけども、やはり人の考えなんですね。

活用、特に観光活用が話題になりますけども、観光活用というのは、あくまで本質的価値を失わないことによって成り立つわけですね。損失、価値を失ってしまうとその活用は成り立ちません。活用というのは本質的な価値を維持できるから成り立つんですね。まさに、その観光というのは、資産の価値を高め活用していくこと、それが地域文化の光を観ると、文字どおりの観光という

ことが言えるのではないだろうかということでもまとめさせていただきます。

どうもありがとうございます。

司会

パネルディスカッション1のご報告、森下様でございました。先生ありがとうございました。

次にパネルディスカッション2、「【現在（いま）を知る】歴史・文化遺産都市を支える『まちづくり』」のモデレーターを務めていただきました、帝京大学経済学部教授で奈良県立大学名誉教授の麻生憲一様からご報告をいただきます。

麻生様、お願いいたします。

パネルディスカッション2

帝京大学経済学部 教授/奈良県立大学 名誉教授
麻生 憲一



ただいまご紹介に預かりました、帝京大学の麻生と申します。よろしくをお願いいたします。私のほうは、ちょっと手短にご報告させていただければと思いますので、よろしくをお願いいたします。

昨日、セッション2といたしまして、「【現在（いま）を知る】歴史・文化遺産都市を支える『まちづくり』」というテーマで、パネルディスカッションにてみなさんと議論をさせていただきました。

パネリストのみなさまですけれども、大野正法執事長をはじめとして、谷垣裕子観光局長、山本雅章教育長、そして熊田順一JTB総合研究所の主席研究員、その4名のもとでディスカッションをさせていただきました。

ディスカッションのテーマは大きく分けて3つございます。

一つは、斑鳩町の魅力とは何かということ、それぞれパネリストのみなさんのご意見というか、個人的な

意見も含めてお話をさせていただきました。

そこで、総合的にみなさんの中で出てきた意見は何かと申しますと、やはりこの法隆寺周辺をはじめとして、この斑鳩にはさまざまな歴史的な、または文化的な非常に優れた遺産、もしくは優れた観光資源があるという認識のもとで、みなさんさまざまなご意見、それに共通するご意見を述べていただきました。また、文人墨客と呼ばれるような人たちから、和歌とかそういったものも含めて、さまざまな文化的な形での継承というのも、これまでなされてきたところではないかというふうに思っております。それだけこの斑鳩、この奈良のこの斑鳩の里というのは、これまでも数多くの方々が支えてきて継承された、そういったすばらしい地域であるというような認識で、我々は一致しました。

セッションのテーマの2としては、ではそのなかで、どのような課題というのがこの斑鳩の中であるのかということで、またみなさんにご意見をいただきました。

課題というのは、やはり先ほどのテーマ1につながっていくわけですが、これほどすばらしいものがあるなかで、観光客、インバウンド、また、ここに住む住民の方々に、そのようなすばらしさをどれほど伝え切れているのかということの難しさというのを、2のテーマではお話を、みなさんしていただいたところでございます。特に、子どもたちに対してどのような形でこのすばらしさを、学校教育を含めて伝えていけるのか。また、若手の人材育成、またはこのような形で後継者、そのようなものをいかに作り出せていけているのかといった話も、テーマ2の中では出てきておりました。

なおかつですね、やはりこういったすばらしい資源・施設があるなかで、そういったものを情報発信としていかに伝え切れているのか。これはもちろん国内だけではなくて、世界的な意味で情報発信というのがいかにできているのか、その辺も意見として賜りました。

これはちょっと私の意見ですけれども、みなさん多分ご存じの方も多いと思いますが、フェノロサという、先ほどちょっと先生のほうからもあがったフェノロサが、実はこの奈良に来て、救世観音が今、開帳されておりますけれども、ああいったもののすばらしさを見てですね、実はフェノロサが奈良市内のお寺で、100年前以上ですか、「奈良のみなさんに」ということで、強くフェノロサが講演をされたことがあります。そのときにそのフェノロサが何を言ったかということですね、やはり「奈良にはこれほどすばらしいものがあるんだ」と。「そういうものをみなさんご存じですか」という言い方を、今から1

00年前にされております。その中で、やはりフェノロサが言うのは、そういったものをいかに継承していただけるのか、つまりこの奈良のすばらしいものを観光地のみなさん、特に奈良にお住まいのみなさん、そういう人たちがいかにつなげていけるのか、そういったことをもう100年前に言われていたわけですね。それが、まさに今こういった形で第10回を迎え、また、今のような観光資源という形で見るとすれば、伝え切れている部分もあるのではないかと思います、まだまだだけど「十分に」とは言えない部分もあるのかなというふうに思っております。

そのなかで、テーマ3としては、ではそのようなものを今後どのように引き継いでいけばいいのかということ、パネリストのみなさんから話をいただきました。

その中で出てきた一つは、やはり学校教育の重要性という中で、子どもたちへの教育、こういったすばらしさをいかに子どもたちに伝承し、引き継いでもらうのかというお話が出てきております。その中で、山本教育長のお話の中で、こんなのがあるんですね。これちょっと私、昨日いただいたんです。「いかるが楽（がく）」と呼ばれるもので、これは今、斑鳩の小・中学校の学年、児童・生徒のみなさんに、こういったものを配って教育をされているようです。つまり、斑鳩にいるそういった小さな子どもたちに、この斑鳩のよさというものをですね、年間を通じて、また1学年から6学年までさまざまな形で教えていく。そういう意思を斑鳩町は強くお持ちであるということ、昨日の報告の中でも語っていただきました。

今日は、何か後ほどですね、中学生のみなさんがこの会場にも来ていただけるということなので、またそれは非常に楽しみにしております。

それ以外に、先ほど出てきた人材を育成することの必要性を、どれほど我々が認識しているのかという中で、やっぱりですね、教育だけではなくて、さまざまな機会に我々がそういう人たちを招き入れるということが必要ではないかと思います。これは日本全国、少子高齢化のなかで、なかなか若い世代の人たちが伸びていけないと。そういうような人たちに向かって、やはり我々世代、我々というかもう高齢化世代の人たちが、どういった形でそういった人たちに引き継いでいくものを渡していけるのか。その辺が我々にとって、これからまさに問われていく部分ではないかなというふうに思います。

その一つのきっかけというのが、この世界遺産と呼

ばれるものではないかと思えます。今日はさまざまな世界遺産に登録された各市町村、自治体の方々にも来ていただいております。それぞれの中に、さまざまなすばらしい世界遺産につながるもの、観光資源につながるものがございます。それを、ただあるということだけではなくて、やはりいかにそういったものを子どもたちの世代も含めて引き継ぎ、なおかつここであるような普遍的価値としてそれを伝承していくのかと。それはまさに各自治体様含めて、我々住民含めて、みんながこれは他人ごとではなくて、強く心にとどめてすすめていくべきではないかというふうに思っております。

昨日のパネルディスカッションでは、また細かな意見、さまざま出ておりましたけども、ちょっと時間的な調整もあるようですので、私の意見としては以上で報告を終わらせていただきます。

どうもご清聴ありがとうございました。

司会

昨日行われました、パネルディスカッション2のご報告、麻生様でした。ありがとうございました。

講演

司会

続きまして、講演に移らせていただきます。

本日は講演いただきますのは、株式会社JTB代表取締役社長執行役員でUNWTO賛助加盟会員アジア太平洋地区代表理事の山北栄二郎様でございます。講演のテーマは、「【未来を創る】持続可能な観光を考える～文化遺産とツーリズム産業からの視点～」でございます。

山北様、よろしくお願いいたします。

株式会社JTB代表取締役社長執行役員/ UNWTO賛助加盟会員アジア太平洋地区代表理事 山北 栄二郎



みなさまこんにちは。JTBの山北と申します。今日は30分と貴重なお時間を頂戴しまして、この「未来を創る」というテーマでお話をしたいと思っております。

世界遺産ですから、やっぱりどうしても伝統を守るとかですね、やはり古い物を壊してはいけないとか、これまでもいろいろなお話の中で、オーバーツーリズムというお話もありました。観光はどちらかという、世界遺産の敵ではないかというような見方をされる方もいらっしゃると思うんですけれども、先ほど、先生方のお話の中にもありましたように、やはりこの世界遺産という名前ができた由来を考えていただいても、未来の子どもたちに、この美しい自然であったり、文化であったり、こういうものをどうやって伝承していくのかと、残していくのかと、こういうテーマの中で、しっかりと維持をしていかなくちゃいけないという意味で考えますと、やはり一つは、そこに来ていただく。そこに来ていただいてその世界遺産を見ていただく。そこで感動を得ていただく。こういうことがまず必須ですし、これを維持していくためにはやはりお金も必要です。やはりそういう経済の循環をつくっていくことも必要だということで、確かにオーバーツーリズムでマイナス面も出てくる。こ

れをどういうふうにカバーしながらやっていくかというようなことが、すごく大事ではないかということで、非常にツーリズムに関わりが深いテーマだと思っています。

今日は、たくさんのお話ができない時間なので、ちょっとポイントだけお話ししますが、JTBという会社ですけども、実は法隆寺さんに比べると、もう全然歴史はもちろん浅いので、赤ん坊みたいなもなんですけども、111年目を迎えています。実は、幕末に渋沢栄一がパリの万国博覧会を見て、世界中から人が訪れて、さまざまなフランスの自慢ができるようなところを訪ねていただいたり、経済が潤っていくような姿を目の当たりにして、日本に戻って「喜賓会」というのをつくったというのが、当社のもともとの形であります。そこから発展して「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」ということでやってきたということで、やはり日本をどういうふうに世界に知らしめていくか、そういう意味でも今日のテーマにも非常に深い関心を持っています。

先ほど、ご紹介の中で、もう一つUNWTOという紹介がありました。これは、国連の世界観光機構でございます。日本も当然、加盟国になっているんですが、私は民間の立場から、アフィリエイトメンバーということで、賛助会員で長年にわたって参画しております。その今、アジア地区の代表理事をやっていますので、そういうことで、実はこれサマルカンドというウズベキスタン、これも世界遺産ですけどね。サマルカンドでの先日、会議がありまして、ここでもいろいろなテーマで話がされました。ここで話されたのは、やはりサステナブルツーリズムであったり、世界中の世界遺産をどういうふうに守りながら観光にどう投資をしていくのか、テクノロジーをどうするんだ、人材をどうするんだ、いろいろなテーマの議論がありました。

私自身も、実はヨーロッパに長くおりまして、ハンガリーとかデンマークとか、オランダとかにいましたんですが、その勤務の中でいろいろな経験をしました。

ヨーロッパには世界遺産がたくさんございます。ポーランドの、例えば、ヴィエリチカいうところですね、南のほうですけど、塩の、塩坑と言われる、ずっと洞窟があるんですね。塩を掘り出していた。これでザルツブルグみたいな、ザルツブルクというのは塩のお城、塩のまちですから、ああいうふうなヨーロッパの中心部で、岩塩を掘り起こして富を稼いでいるところですけど、ヴィエリチカの塩坑なんか世界遺産に一番最初に指定されたところなんです。そこで塩坑なので、大きな、とてつもなく高い天井の空間があるんですね。それを

使ってそこで舞踏会を開いたりとかですね、さまざまな活用がされてる姿を見てきました。ただ、さっきありましたように、宿泊しない、「奈良に宿泊しない」って話してはみたけど、泊まらないと確かに経済効果はそのまちは生まれませんですけど、そんな塩の掘ったところなんか泊まらないですね。さすがに泊まらないので、ポーランドは上手だなと思ったのは、南のエリアはクラクフという歴史的なまちがあって、その近くにアウシュビッツの世界遺産にも指定されてるところがありますね。この南のエリアを、全体で宿泊も伴ったルーティングをちゃんとつくって、その中の一部にそういう塩の、塩坑を訪ねるといふようなところもあるということで、そのようなことの経験の中から感じたこともお話ししたいと思います。

UNWTOですけど、ご存じのとおり、実は世界に2か所しか拠点がありません。本部はマドリッドなんですけども、なんとサウジアラビアと奈良に事務所があります。そして個々の活動をしています。構成員160か国で、このような先ほど申しあげた民間の賛助会員、民間を中心とした賛助会員がこのようなメンバーであります。ここにありますように、理念として、観光を通じた豊かな社会の実現と各国の相互理解の促進、責任ある持続可能な観光の促進を目的とした国際連合の専門機関であるということで、今日のテーマにも非常に近いところになります。

それから、この取組みの中身としては、このようなことがあります。まさに世界遺産の地域を、どういうふうに持続可能な発展をさせていくのかというテーマの議論が、あちこちで行われているところでもあります。

もう一つ、UNWTOとUNのUNESCOですね、「UNESCO世界遺産」のUNESCOの連携イベントが開かれたりしています。ここにあるのは、UNWTOが日本で開いた会議の例ですけれども、2016年のアジア太平洋の合同地域委員会があったりとか、昨年はこの奈良でガストロノミーツーリズムの世界大会がありました。私も参加させていただきましたが、非常に世界中からたくさんの方がいらっちゃって、盛りあがって、食をテーマとして、どのように観光地を豊かにしていくかというような話がされたということでもあります。

世界遺産ですが、日本は25件ですよ。世界は今、これだけあると。もうご承知のとおりだと思いますが、1,199件。そのうち、文化遺産が非常に多いというのが特徴だと思います。国別にイタリアがなんと一番多いんですね。59件あると。日本に比べると倍以上指定され

ています。中国、ドイツ、フランス、スペイン、インドということで、やはりヨーロッパにかなり偏ってる状態です。

その後、アジアのほうにも指定が増えてきて、日本ではこの法隆寺を筆頭にですね、30年の歴史の中でこれだけの指定がされてきたと。この文化遺産だけ取りあげまして、この訪問者数が1億1,300万人ということで、かなりの数の方が訪れています。ただ一方で、日本のインバウンドで見ますと、日本人はたくさん訪れてますが、外国人がコロナ前の2019年は3,200万人日本を訪れましたが、これ世界的に見て、これをオーバーツーリズムと言うべきかどうかというのは、非常に難しいところで、フランスなどは8,000万人を超えて、1億人ぐらいをインバウンドを目標にしているなかでいうと、必ずしも日本というこれだけの遺産を、ヘリテージを持った国でありながら、インバウンドの数というのは、実はまだそんなに多くないと理解したほうがいいんじゃないかなと思います。

ただ、問題は集中してしまうということで、同じ観光地に集中していく。せっかくこれだけの世界遺産を持っているにもかかわらず、やはり集中するのは圧倒的に京都ですね。京都に5,500万人訪れてるということに対して、富士山などはまだ非常に少ない数です。数十万人という状態ですね。ですので、それぐらいばらつきがあります。京都の次は、もう1,000万人台ぐらいになってしまうということで、奈良が非常に多いですけども、かなり集中しているということですね。

それから、ツーリズムとの関係に入っていきます。何でツーリズム、観光と世界遺産を組み合わせるのかということなんですが、これが今、交流が創造する価値ということで、私どもで整理しているさまざまな価値なんですけども、ここに3段階あります。最終的に人を満たしていくんだということで、感動や学びや健康にもつながっていくということで、人は動くことによって健康にもなりますし、もともと歴史でいうと、アフリカに人類が生まれて移動を始めたときから、旅を続けてるのが人類であって、これが人にとって本質的に必要なものであると。

それから、真ん中に社会を発展させるような力があります。これは経済だけではなくて平和につながる。これはもう間違いなく大きく貢献できる分野でもある。

やはり土台のところに地球の豊かさを守るということで、これはやはりそれだけ自然に触れたり、文化に触れたりすることで、人々はそのよさをしっかり守ってい

きたいと、未来につなげていきたいと。こういうふう
に思うということが大事で、放置されているものは、実は
あまり大事にされていないということなので、例えば、
ヨーロッパのまちが、まちを100年以上たつた建物が一
番高いわけですよ。そういうふう古いもの、これから
未来に向けて残していきたいものを、とても大切にす
る文化があるということ。こういうこととも関係する
と思いますが、地球の豊かさを守っていくというの、ツ
リズムの大きな価値だというふうに思っています。

それで、ちょっとプラクティカルな話になりますが、
実は人が動くことで、こういうふうさまざまな価値が
生まれるんですけども、ここに関わる人々というのは旅
行会社だけでは決してありません。旅行会社はほんの
一部で、宿泊、鉄道、航空会社はもとよりですね、バ
スもタクシーもありますけど、それに伴ってガイドさん
であったり、今日も高市先生のほうから話がありました
けど、やはりガイドの育成であったり、この伝統的な建
物をどういうふう維持するかという職人の方の力で
あったり、それから食に関わること、これはレストラン
だけではなくて、その背後に農業そのものがあります。
それから、宿泊するとそこにいろんなアメニティがあ
ったりするので、これに関わる事業者の方を入れると、
世界のGDPの10%を占める、10%超えていると言わ
れています。従事している人も、それぐらいの数になり
ます。これぐらい裾野が広いということですね。

そういうなかで、このUNESCOがどういうことをや
ってるかということで、これはもうみなさんご存じのと
おりですので、さまざまなテーマで取り組みがされて
おりますが、ここに先ほど申しあげたように、UNWTO
というのは、共催でさまざまなところで国際会議が
開催されています。「シムリアップ」、「マスカット」
、「イスタンブール」、「京都」と書いてありますが、
こういう世界中のヘリテージのあるところでさまざま
な会議がなされてる。テーマを見ていただくと、パ
ートナーシップであったり、持続可能な開発であ
ったりとか、観光と文化とSDGsというテーマで
京都で開かれています。こういうテーマでいろ
んな議論が、世界中で行われてるということ
ですね。

それで、残りの時間で少し具体的な事例をお話
したいと思います。

ちょっと大きく3つにテーマを分けてお話し
したいと思いますが、守るためには、来てもらわ
なくちゃいけないとか、経済を起こさなく
ちゃいけないとか、こういう逆説的な言い
方をしますが、来てもらうためには、行

かなくちゃいけないということもよく言う
んですけども、インバウンドでたくさん
の人が来てほしいなと思うと、受け入れ
の気持ちばかり考えてしまいますね。自
分のところがすばらしいので、何とか紹
介したというふうで考えてしまうと。こ
れだけだとなかなか来てくれる人は、
ピンと来ないですよ。ですから、自分
が旅行者になって、逆に世界の世界遺
産を訪ねていただくと、そこでどうい
うことがされてるのかというのがよく見
えます。ですから、そういう形でヒント
を得ながら、どうやって、例えば、こ
の混雑緩和を行っているかという例を
ちょっと話していきます。

このアルハンブラも世界遺産、有名
ですけども、スペインのアルハンブラ
宮殿です。ここのすばらしいところに
みなさん、世界中から押し寄せていた
わけですね。なかなか入れなくなるぐ
らい混雑、いつも混雑してました。こ
こに予約制にしたんですね。単純な話
です。予約制になって、入場制限をし
たんですけど、「数を来てくれるな」と
言ってしまうと、そもそも価値が紹
介できませんけど、来てもらう中で、
時間帯をですね、この中に朝の時間
とか夜の時間を使ったプログラムがあ
ります。夜とかですね。こういうもの
をやることで、訪れる時間を長くし
た。昨日のライトアップも間違いなく
その一環だと思いますが、時間をも
っと有効に使うために、みんな同じ
時間に来るんですね。集中して大変な
状態になるので、予約制にして時間
を延ばす。今、京都でも結構、朝の
時間を使った観光というのは増えて
きてますが、こういう工夫がされた
例です。非常に今アルハンブラは
いい形になりつつあります。それ
から、今のちょっと付け足すと、こ
の入館のための入場料が、昼と夜
で値段が違うとか、こういう工夫も
ひとつ工夫で、結構重要なポイント
だと思います。

二条城ですね。これも前売り電子チ
ケットにして、随分変わった例です
ね。

それから、これはヨルダンのペトラ
のナイトイベントです。夜は大抵、
世界遺産が死んでいるところが、死
んでいるわけじゃないんですけども、
人が訪れてないところが多いです
けども、こういう夜の時間に分散
して来ていただくということで、
ちょっとまた違った魅力が表現
できる。こういうことがかなり工
夫されています。

先ほど、私が訪れたサマルカンド
も、夜のライトアップがもう本当
に美しいですね。あのサマルカ
ンドブルーが非常に映えて見え
ますけども、こういうことをや
っていると。

東京でもこういうライトアップイ
ベントがどんどん今、

盛んに行われています。

このプロジェクトマッピングですね、こういうものってすごく日本の技術が今、評価されていて、世界から実は日本を訪れる目的の一つに、チームラボのところを訪ねるとか、そういうこともあるぐらい、実はこれ優れてるんですけど、なかなかうまくアトラクトでき切れてない部分もあると思っています。

それから、今度デジタル、先ほどもかなりデジタルが関連してるんですけど、やはりデジタルは一つのキーワードだと思います。矛盾してるようなんですけど、デジタルがあることでアナログがすごく生きてくるということだと思います。

デジタル活用で、これはインドの例で、この世界遺産のアーカイブ化ですよ。データ化して、それを有料で買っていたり、NFTみたいな話があります。今、ブロックチェーンの技術で、その唯一無二の美術品だとかを売るというような形が、新しい形が生まれてますけど、そこまでいかないにしても、データ化してアーカイブ化していくというのは一つのポイント。

それから、これもそうですね。もう一つ、クラウドファンディングですね。これも一つの形で、この法隆寺もクラウドファンディング今やっていただいている、これは一つの維持、メンテナンスをしていくファンドになっていくわけですが、このノートルダム寺院の話は有名な話ですが、このときにフランス国内外から1,000億円集まってるんですよ。クラウドファンディングってなかなか目に見えないところであるんですけど、若い人たちが特にクラウドファンディングに敏感で、すぐに反応して小さなお金をどんどんネット上でファンディングしてくれるわけですね。これで1,000億円集まるというのは、なかなか予算が1,000億円つくというのなかなかないですよ。それぐらい、こういうぐらいのものが民間の人たちからパッと集まる。それだけあのノートルダム寺院のブランディングが成功してたんだと思いますが、これぐらいのことがありました。

それから、この法隆寺の例ですね。これもかなりの規模の金額が集まっています。ふるさと納税が最近流行っていますけど、やはりこれも同じような思いでみなさん、この法隆寺を大事にしたいという思いで出してくれるんですね。こういうやはりみんなを巻き込んでいくような力というのはすごく大事だと思います。こういう形のものもあるということですね。

それから最後に、これ俗っぽく聞こえるかもしれないんですけど、お土産なんですけど、お土産もかなり今、

高度化してまして、昔はよく観光地へ行くと買って帰るんですけど、持って帰るとあまり役に立たないようなお土産が多かったと思いますけど、最近は結構、お土産自体にすごく価値があるようなものですね。

これは北京の故宮博物館で作られてるお土産品の数々です。

それから、この土産コンテストが行われた長崎の例ですね。こういう非常によいものができてきてと。

この富士山グラスは、実はこの私のほうで作ってるんですけど、JTB商事というところで販売してます。これは富士山の世界遺産の指定を受けて、こういうものを今、これは非常に外国人の方にも喜ばれていますけども、こういうものもできてきてと。

それで最後に、ちょっと周遊させる流れで、先ほど申しあげたように、一つの場所だけで完結するとなかなかできないんですけど、広域で、さっき世界遺産ごとが連携してもいいんじゃないかというお話もあったと思うんですけど、こういうやっぱり移動というのが一緒にセットでできるというのは大事で、ルーティングとストーリーづくり。これは実はヨーロッパに今、ヨーロッパ・ムンドという会社がございます、そこでずっとヨーロッパ中を周遊させるプログラムを組んでます。小さい、自分でバスを仕立ててヨーロッパ中を回るとすごくコストがかかるんですけど、小さなサークルをいっぱいつくってですね、そこに自由自在に乗って降りていただくようなことで、実は手の届かなかったような場所に、なかなか行けなかったような場所に行けるということです。これもかなりの世界遺産が含まれています。

それから、日光で今、MaaSをご一緒させていただいてますが、ここでも非常にモビリティとセットで観光地、これまで訪れなかったような場所も含めて行く。フリーバスを作って行っていただくとかですね。それによって、マイカーで全部していたものを、公共を使うような流れもつくって行けると。これも非常にサステナビリティという観点からいい動きがあります。

それから、熊本で鍋ヶ滝というところあって、こういうきれいなところなんですけど、ここも渋滞が、もう車が集中していたところなんですけど、ここにGoodFellows JTBというところで入場券の仕組みをつくってまして、これはデジタル上で予約していくような仕組みをつくったら、交通渋滞が一気に緩和して、住民の方も非常に困っておられたんですけども、渋滞に巻き込まれなくなったというような例もございます。

これは小豆島の光の祭典、ナイトタイムエコノミーづ

くりというようなこと。

それから、那覇の首里城の再建もクラウドファンディングをやったりとかですね。

JTBでは「地球いきいきプロジェクト」というのを、これはもう相当長いことやってます。1982年からやってますが、我々の世界中の現地の社員が、そここの場のクリーンアップをするというのもあるんですが、旅行に来た方にも一緒に入っていて、ごみを拾っていただいたりしながら観光地をきれいにしていくと。ボランティアになります。こういうようなことを世界中で行っております。

ということで、そろそろお時間でございますのでまとめますが、とにかく守っていくだけではなくて、育てていくというようなことをすすめていかなければいけない。観光地に来ていただくための努力もしなくてはならない。来て、そして、そこで世界遺産の大切さを知っていただく。このことが、保護していくような気持ちにつながっていくということも大事ですし、これから先ですね、これを企画していく。持続的にこういう活動が行われていくようにしなくてはならないので、これをプランニングする力がすごく必要だと思っています。

こういうことをつないで、先ほどの地域でどう展開するのかとか、それぞれの自治体が連携してやっていくんだとか、世界の事例を踏まえながら、どういうふうに日本に導入してくるか、こういうことを考えるとかということも大事かなと思います。

最後に、エコシステムという言葉を書きましたが、生態系づくりです。これができていると、長年にわたって、その観光地であったり、世界遺産が後世に伝承していけるような仕組みになるということで、このエコシステムづくりが大切かなというふうに思っております。以上となります。

今日は、もう本当に貴重なお時間を頂戴しましたが、やはりこれから日本が世界に向けてもっともっと高い立ち位置を持って、世界に誇れる日本の世界遺産が世界の人々に発信されて、日本もそれによってリッチになっていくと。未来永劫、子どもたちの代まで発展していけるような社会になればというふうに思っておりますので、今後ともよろしく願います。

どうもありがとうございました。

司会

山北様、ありがとうございました。貴重なご講演ありがとうございました。

次に、首長会議に移らせていただきますが、場面の設営がございましたので、今しばらくお待ちくださいませ。

(舞台転換)

